

古事記から学ぶ その8
天照大御神の逆襲

地上の葦原中國(あしはらのなかつくに)では、大国主神が出雲にいて、その勢いを少しずつ延ばしていたが、高天原では天照大御神が、國を治める者として別な者を考えていた。

<1> 天照大御神の思惑

「この豊葦原の千秋の、長五百秋(ながいおあき)の水穂の國は、私の子どもである正勝吾勝勝速日天忍穗耳命(まさかつあかつかはやびあめのおしほみのみこと)が治めるべきである」と詔を下して、御子に役目を委ねて葦原中國に降りさせた。

天忍穗耳命(略称)は天(あめ)と地(つち)の境に架けられた天浮橋(あめのうきはし)まで来て、地上の様子を眺めた末、高天原に戻り、「ひどく騒がしく乱れている様子」と天照大御神に報告した。報告を受けて天照大御神は、高御産巢日神(たかみむすびのかみ)と相談した結果、天安河の河原に八百万(やおよろず)の神々を集めて対策会議を開くことにした。知恵者である思金神(おもいかねのかみ)に良策を考えさせるのが狙いでもあった。

その結果、「地上の國を騒がしくしている神々を抑えるには、天菩比神(あめのほひのかみ:天之菩卑能命)を使者として送り込むのがよからう」ということになった。

天菩比神は命を受けて葦原中國に出向いたが、大国主神に媚びへつらうばかりで、三年経っても帰ってこなかった。

<2> 天照が送り込んだ使者

天照大御神と高御産巢日神は神々を集めて再び策を協議し、思金神から示された次の策に着手することにした。●天津國玉神(あまつくにたまのかみ)の子である●天若日子(あめわかひこ)を使者として送り込むことが次の策となった。

そして、鹿狩りに使う天之麻迦古弓(あめのまかこゆみ)と天之波波矢(あめのははや)を天若日子に持たせて、地上に差し向けた。

天若日子は、葦原中國に到着すると早速、大国主神の娘である●下照比売(したてるひめ)を妻にし、この國を我が物にしようとして謀をした。結果として、八年経っても高天原への報告は何一つなかった。天照大御神と高御産巢日神は再び神々を集めて次の策を協議した。

「天若日子はなぜ地上に留まって戻ってこないのか、訊ねてくるべし。しからは、誰を送り込むべきか」神々を代表して思金神はこう答えた。「●雉名鳴女(きぎしななきめ)が良いでしょう」

「葦原中國の荒れすさぶ様を鎮圧するために送り込んだのに8年も音信不通とはどういうことだ」と聞いてくることを、雉名鳴女に命じた。

天から下って地上に降りた雉名鳴女は、天若日子の家の前の桂の木に止まって、天神(あまつかみ)からのメッセージを復誦した。

この家には、●天佐具売(あめのさぐめ)という意地の悪い召使の巫女がいて、天若日子に託宣した。「この鳥は不吉なもの、殺してしまいなさい」

天若日子は、天神(あまつかみ)から渡された天之麻迦古弓(あめのまかこゆみ)と天之波波矢(あめ

のははや)を出してきて、この雉を射殺してしまった。

ところがこの矢は、雉の体を貫通して天空に上がって行き、安河原にいた天照と高木神(たかぎのかみ:高御産巢日神の別名)の元に届いた。

<3> 天若日子の死

矢を突き抜けてきた穴に戻して突き返し、こう言った。「もし天若日子が、約束通り荒れすさぶ神を倒したのなら天若日子の手に戻れ。もし命令に背いているようなら、この矢にあたって死ね」

すると矢は寝ていた天若日子の胸に刺さって、天若日子は死んでしまった。

この出来事から、「還り矢は恐るべし」という諺と、「雉の使いは行ったきり帰ってこない」つまり「雉の頓使(きざしのひたつかい)」という言い伝えが生まれた。

(現代の「ことわざ辞典」を調べてみたが、いずれも載っていないかった)

夫を失った下照比売の泣き声は高天原まで届き、高天原にいた天若日子の父親天津國玉神やその妻子たちは下界に降りてきてともに嘆き悲しんだ。

葬儀の準備が進められて、死者を収めておく喪家(もや)を造り、河の畔に住む雁を「棺に寄り添って食べ物を盛った器を頭にのせて歩く岐佐里持(きさりもち)」とし、鷺を「喪家を掃除する箒を持つ箒持(ははきもち)」とし、翡翠(かわせみ)を「死者に食事を供える御食人(みけびと)」とし、雀を「米を搗く碓女(うすめ)」とし、雉を「葬式の時に泣く哭女(なきめ)」とした。

そして八日八晩にわたり、死者の魂を慰めるために歌い踊った。

この時、●阿遲志貴高日子根神(あぢしきたかひこねのかみ)が、天若日子の弔いに来訪した。

この来訪者の顔から姿形まで、天若日子に生き写しだったので、父(天津國玉神)も妻(下照比売)も皆声を上げて泣き、手足にすがりついた。

阿遲志貴高日子根神は驚くとともに、「俺を死者と間違うとは何事か」と激怒して、腰の剣を抜いて、喪家を切り捨て蹴り飛ばしてしまった。飛ばされた喪家は、美濃国の藍見河(現在の長良川)の上流の「喪山(もやま)」という山になった。美濃太田から郡上八幡に向かう長良川鉄道の美濃市駅の西方にある喪山天神社に、その由緒が記されている。(https://yahoo.jp/6euh8U)

喪家を切り捨てた太刀は、「大量(おおばかり)」と言い、「大葉刈り」の意味を持つと言われており、別名を「神度剣(かむどのつるぎ)」とも言う。

阿遲志貴高日子根神が激怒して飛ぶように立ち去った時に、妹である下照比売(天若日子の妻)は、自分の兄の名前を神々に知ってもらおうと思って、歌を歌ってその名を明らかにした。

「……前略、あの輝かしく男らしいあの神は、私の兄の阿遲志貴高日子根神です」

天照の作戦はことごとく失敗に終わった。思金神ほか神々は再び策を練った。

その結果、天岩屋にいる●伊都之尾羽張神(いつのおわばりのかみ)またはその子である●建御雷之男神(たてみかづちのをのかみ)を使者として選ぶことにした。

しかし伊都之尾羽張神は、「天安河の流れを堰き止めて、水を横手に流しているの、行く道がふさがっている。他の神では行くことはできないでしょうから、●天迦久神(あめのかくのかみ)を使いに出して行くか行かぬか聞いてみるのがよいでしょう」と答えた。

天迦久神が使いに出されて、伊都之尾羽張神に意向を尋ねた結果、息子の建御雷之男神が使者に選ばれることになった。

<4> 閑話休題

さて、ここで少し過去を振り返って、登場人物の人間関係を思い出してみると……

*火之野芸速男神(ひのやぎはやをのかみ)＝伊邪那岐と伊邪那美の間に生まれた子で、火の神。

伊邪那美は、この子を生む時に女陰に火傷を負い、これが元で命を落とした。

悲しみと怒りから父親である伊邪那岐は、息子(火之野芸速男神)の首を切り落とした。

*建御雷之男神(たてみかづちのをのかみ)＝伊邪那岐が火の神(火之野芸速男神)の首を切り落とした時鏝際から落ちて流れた血から生まれた。刀剣を鍛える時の火の働きを称える神。

*阿遲志貴高日子根神(あぢしきたかひこねのかみ)＝大国主御神と多紀理毘売命の間にできた子別名は迦毛大御神(かものおおみかみ)。

*下照比売命(したてるひめのみこと)＝大国主御神と多紀理毘売命の間に生まれた子。つまり阿遲志貴高日子根神とは兄妹の関係になる。天若日子の妻。

<5> 大国主の死 そして葦原中國の行方は

葦原中國(あしはらなかつくに)は、大国主神が手を広げ始めているさなか、高天原にいる天照大御神は、我が子である正勝吾勝勝速日天忍穗耳命(まさかつあかつかちはやびあめのおしほみのみこと)に治めさせたいと思って、ここまで様々な策を講じてきた。

そして、何人目かの使者に選ばれた建御雷之男神(たてみかづちのをのかみ)は、船の神である天鳥船神(あめのとりふねのかみ)を伴って、高天原から降りて、葦原中國に向かった。

二人は出雲國の伊那佐(いなさ)の浜辺に着いた。(https://yahoo.jp/sQmUUx)

伊那佐は、現在の出雲大社の西側の日本海に面した海岸で、大国主神(またの名を葦原色許男)が須勢理比売を妻とした時に宮殿を構えた宇迦能山(うかのやま)に近い所らしい。

伊那佐の浜で、波の中に劍の柄を刺して、切っ先の先端に足を組んで座り、大国主神に尋ねた。

「天照大御神と高木神の命を受けて使者としてやって来た。汝が治めている葦原中國は、天照大御神の御子に委ねるべきだと申されている。汝の考えは如何なるものか？」大国主はこう答えた。

「私はもう年老いており、その問いに答えるわけにはいかない。我が子●八重言代主神(やえことしろぬしのかみ)が答えることになるが、御大の崎(みおのさき:現在の美保の岬)へ釣りに出かけている」帰ってきた八重言代主神は答えた。「この國を天神(あまつかみ)の御子に委ねることに異論はない」他にも同意を取り付けるべき者がいるかを尋ねられると、大国主は、

「もう一人の子●建御名方神(たけみなかたのかみ)がいる」と答えた。

力自慢の建御名方神が、「まずは力比べからだ」と言って、建御雷之男神の手をグイとつかんだところ、腕はたちまち氷柱になり、劍の刃に変わったので、驚いて身を引いた。

今度は自分の番だとして、建御雷之男神が建御名方神の手をグイとつかむと、まるで葦の若草をつかむように投げ捨てた。さすがの力自慢もこれには驚き、逃げ出した。

逃げる者を追いかけて、科野國(しなの:現在の信濃)の洲羽の海(すわ:現在の諏訪湖)まで追い詰め、いざ殺さんとしたところ、建御名方神はこう言った。

「父大国主、我が兄弟の八重言代主神の言う通り、葦原中國は天神(あまつかみ)の御子にさしあげます」。建御雷之男神は、大国主神の所に戻って念を押し、再確認をした。大国主神はこう答えた。

「天神の御子の館とおなじような立派な宮殿を造って、私を祀ってもらえるならば、遠い黄泉國に身を隠すことにいたしましょう。私の子どもである180人の神は、八重言代主神がまとめて、お仕えます」この言葉を最後に、大国主神はこの世を去った。

大国主神の遺言に沿って、出雲國の多芸志(たぎし)の浜辺に神殿を築き、●水戸神(みなとのかみ)の孫である●櫛八玉神(くしやたまのかみ)を御膳(みけ)を司る膳手(かしわで)として、御饗(みえ)を差し上げて祝詞を奏上した。

さらに櫛八玉神が鵜に変じて、海中深く潜って泥を掬い80の器を作るなど、様々な神事を執り行った。(多芸志の浜は、現在の出雲市武志町ではないかと言われている。https://yahoo.jp/4_4ghH)

天神(あまつかみ)の使者として任を果たした建御雷之男神は、高天原に帰って、無事平定が済んだことを報告した。

かくして、葦原中國は、天照大御神の意向通り、正勝吾勝勝速日天忍穗耳命(まさかつあかつかちはやびあめのおしほみのみこと)が治めることになった。

「古事記 上巻五」の原文を覗いて見たら、こんな記述で締めくくられていた。

故、建御雷神、返參上、復奏言向和平葦原中國之狀

以上